

六 廿 化

10

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

えん
延

せきれい

山田六甲

けしおたをさるゐりはまのまるぐや
削尻押薪折佐る椅子龍張り曲飲み間の留守グ瘦
り込鮪積り渡るん子神りげみ抜守電メせこけし
ゐるみ筐のほどきあふ月のかげるにふと覚め秋の夜半
爪の得意な猫よ紅茸の筥の下の芒をたてまつる
の逆むけ夜の長し

り 琉球りゅう 諸いも もう 掘る ころか 晴三日
 に 人間 は いい ないと 打つ や 鉦 叩
 お 二人さん どうぞ 二階へ 走 蕎麦
 ま 松本さん どうぞ 座敷へ 零余子めし
 さ 佐津さんは 予約の 席へ きのこ 飯
 ふ 吹き 抜けの 梁ひびき あふ虫 時雨
 み みんみの 鳴きやむ ことを 怖れ けり
 く 悔い 先に 立てば よからむ 零余子 とる
 し 趣味 越ゆは 病ぞ 燈火 親し んで
 ゆ 優劣 の は つきり 毬 の 中の 栗
 う 後にも 耳 ありに けり 月の 客
 せ せきれいの 日面に出 てむ つみ 合ふ
 い 石の 目の 鑿 あと 著き 秋 日 かな
 ろ 櫓を 上げて 月の 雫の こぼれ けり
 う つむ けば ことに 匂ひ ぬ 秋 薔薇

祝・仁尾正文先生句集『晴朗』「矢車の廻りある竿倒しけり」を冠して。

Rこう会(明石城公園9月吟行)三十苦

秋さうび

大楠に囲まれゐたる秋彼岸
露草の紫色に病みもせず
白薔薇の秋風吹いてきたりけり
彼岸花群れて咲かざる城の杜
靴下を秋の日差しに脱ぎにけり
風の色小枝を踏めば骨の音
木の枝が蓋をしてゐる秋の空
渡り鳥すとんと森のはげ地かな
秋薔薇にクラリネットの音とびぬ
木の实降る柵の向うの土崩れ
みんなのもう鳴きやんでをりにけり
秋涼や森の明るきひとところ
秋天の雲広がりて淡きかな
森の上森の中へと小鳥来る

宵月の人の足跡名残りかな
うつむけど近づいてゆく秋薔薇
秋の蚊に指の間を刺さるとは
木斛の実をしげしげと見上げけり
飛び石の右は白なる秋の薔薇
髑つたら痛いので秋の紅薔薇は
秋薔薇は化粧忘れしをみなかな
鵲 鴿 に 壽 色 風 吹 け り
秋薔薇紅の匂ひの濃かりけり
老いにけり毒茸には目もくれず
海峡の船笛に秋きざしけり
わくらばに秋風の吹き初めにけり
こほろぎに城の石垣ゆるまざる
おかめ蟋蟀城の深井の水もなし
夏落葉かと訊かれけり口ごもる
毒茸の話聴きつつ句を選む

夏めくや伏してゐる間に爪伸びて 志方章子

紫は豊かななる色豆の花

風光る幼き命駆けくれば

夏めくや伏してゐる間に爪伸びて

夏帽子脱いで頭の湯気払ふ

若楓したたる雨の朱を引ける

なつめくやふしているまにつめのびて しかたあきこ

春頃から病気のこと、で精一杯だった。気がつけば爪がこんなに伸びている。爪は意識しなくても、伸びないで、と思っても勝手に伸びる。薬をすれば髪が伸び、苦勞をすれば爪が伸びるといふ。生きている証拠といえ、生きている証拠。と笑っている証拠。うになればもう病気はどつかへ飛んで行ってしまっている。痛い、痛いの飛んでけ！というが、その通り病の気もどつかへ引つ越していった。それと引き替えにいつの間にか明るい夏のきざしがしている。「めく」とは「特にそう見える」「そういう感じがはつきりする」こと。病気から少し意識が離れて、気持ちにゆとりがもどつた。夏の兆しを捉えるところまで回復。

梅雨明けの風より軽い帽子買ふ 池田喜代持

七月や白い爪切る音飛ばす

拳から昼寝ふかまる動きかな

梅雨明の風より軽い帽子買ふ

田戻りの冷素麺は嫁の味

夜に入りて滝音山を駆け巡る

つゆあけのかぜよりかるいぼうしかう いけだきよじ

佳い物は佳いのでそれで良いのだが、選者より優れた作品を作ったのが悔しい。だから悪意でこの作品を夢風撰にしないと決めていたんだ。解る？。解らない？。そうだよ。ね。やっぱり夢風撰だよ。風より軽い帽子。つて空気より軽いの？と訊かれたら答えられないよ。科学的にも物理的にも存在しないからね、でも詩の世界では存在出来るから凄いいね。買ったての帽子が梅雨明けの風（白南風）に飛ばされていったから出来た作品、なんて無粋なこと考えるんじゃないよ。帽子の軽さは梅雨明けの明るい気分の喩えなんだよ。やっぱり池田さんの才能に嫉妬するなあ。キョッチャンなんちゆうことすんねん！

七色の揃うまで待ち虹懸ける 貝森 光洋

(現代仮名遣い)

山椒魚おのれの時を生きており

昼寝覚孤独が一つ増えており

眠ったふりして握りなおす蠅叩き

眠る時男は孤独夜の秋

七色の揃うまで待ち虹懸ける

なないろのそろうまでまちにじかける かいもりこうよう

すごく、という俗な言葉は使いたくないが、すごく詩的な作品。そんなことはあり得ないけれど、あり得るようなことを言えるのが、文芸上の真実であり力とも思える。この作品こそそうだ。「青ちゃん・紫ちゃん・黄ちゃん・藍ちゃん・緑ちゃん・橙ちゃん！いい？皆そろった」。「先生！赤ちゃんがまだでーす」「えっ赤ちゃんさつきまでいたでしょ？どこに行ったの、困ったわ」「お母さんのとこに行っておっぱい飲んでましたよ」「もう……。あつお母さんが赤ちゃん連れてきましたよ！」「ああ、よかったあ」「ではソーレで出ますよ！みんな笑顔を忘れないのよっ」「いち、にっ、さんーはいっ」見事に虹が出インポー。

西 瓜

永田万年青

風吹かば踊つてをりぬ夏柳
蜻蛉の水面をみつめ去りゆきぬ
幼子に西瓜の先を折り与ふ
水槽を丸く泳げる金魚かな
吸ひ込みて砂を吐き出す金魚かな

青 田 風

松本文一郎

葬祭の帰郷やゆるき青田風
夏薊正論吐かば疎外され
花蓮や水を落とせし櫓石
主なくも水を替へたる金魚玉
鮒釣の浮子にひととき糸とんぼ

鮎

梶浦玲良子

ほうたるの独りで帰るにじり口
草笛や療園の坂のぼりくる
豆筵ひぐれ読経の流れゆく
舟べりの水の香りや鮎の形
流下式枝条塩田かき氷

白 雨

佐津のぼる

白雨過ぎ歩行者天国ずぶ濡れに
日おもてへ翳をつくり黒揚羽
打水のホース全長使ひけり
鯉群るる池に片蔭ありにけり
長雨の雲をしりぞけ遠青嶺

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

10

空
蝉

田
尻
勝
子

箱庭の地蔵を地蔵堂に置く
地球てふ籠に飼はれて夜長かな
朦朧体寄せ来る雲に梅雨の月
空蝉の爪突き通す八つ手かな
神の目は逃れざりけむ炎天下

目
高

筒
井
八
重
子

目高の子追ひかけつこして楽しさう
目高達尻尾ふりふり泳いでる
涼しさう目高すいすい水の中
餌浮けば水面に浮かぶ目高かな
目高らは餌追ひかけて大騒ぎ

蛭雪譚



六甲

二十五年十月号選後に

蜻蛉の水面をみつめ去りゆきめ

永田万年青

水上の草か枝に止まったとんぼが、水面を見つめてまた飛び去った。たしかにとんぼはそのような仕草をする。その仕草とは首や頭をくるりと回す。その様子は考え事をしているようにも思えて愛くるしい。この作品のとんぼは何の理由によって水面を見つめていたのか気になるところである。また頭のほとんども占めている目は複眼。小さな目が集まってできており、ほぼ1万の個眼群で構成されているという。従って少し首を振ると三百六十度見えているのではないかと思われる。その蜻蛉が水の一点を見つめていたというのが気になるところで、見つめるという仕草は、一万個の目を水面に集中させるのだから、どんな角度に頭を持つてくるのだろうかなどと、余計であるが楽しい想像をしてしまう。また見つめる訳が何かあるに違いないと思うのは、俳人の良いところであり、うつつうしい所でもある。(以下略)

六花集

弟少生南骨	青ど青思水	禰茅楊青沙
は年徒天片	鷺し葉春槽	宜の梅梅羅
空の待のと	のや木期に	を輪酒の臍
振汗つ花な	枝りの菟も	さ編実の浮
りの音はり	をの双ど	むむ時く
ば背室家し	へを眼鏡を	人形計で
か中アのこ	て飛びぐざ	ふ回はと
りのマぼ梅	び立ち梅雨	はと筥の動
捕清り咲の	ちぬ蝶ず鉢	の動な
網しスく浜		中きくを

平居 滯子

廣畑 育子

升田ヤス子